

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 表紙・目次ほか   |
| Author(s)   |   |
| Citation    | 史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1977),<br>60(3)                        |
| Issue Date  | 1977-05-01  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/238351">http://hdl.handle.net/2433/238351</a> |
| Right       |   |
| Type        | Others  |
| Textversion | publisher   |

一九七七年四月二十五日  
発行



第60卷 第3号

史学・地理学・考古学

論 説

- 大量移民の流入とノーナッシング党……………笹井悠子 (1)
- 奈良時代「山野」領有の考察……………西山良平 (36)
- 清代咸豊期のアヘン問題について……………井上裕正 (73)
- 特に咸豊8(1858)年におけるアヘン貿易の合法化をめぐる——

書 評

- 彭沢周著『中国の近代化と明治維新』……………金城正篤 (107)
- 堀敏一著『均田制の研究』……………伊藤宏明・内藤あゆち (117)
- 井上泰男著『西欧社会と市民の起源』……………堀内一徳 (124)

紹 介

- 山本武夫著『気候の語る日本の歴史』(栄原永遠男)
- 篠田雄次郎著『聖堂騎士団』(八塚春児)

史 学 研 究 会

京都大学文学部内

挙げているのは時代が合わない(三二頁)。  
 コンラッド・ド・シャンパーニエ↓モンフ  
 エラ(五二頁)。英王、ヘンリー↓エルサレム  
 ↓キプロス王アンリ(一〇七頁)。三〇〇年  
 ↓二〇〇年(一〇八頁)。ルイ十八世↓十六  
 世(一二二頁)。ノルマンディー王↓公(一  
 六三頁)。

誤りというのではないが、固有名詞の表  
 記で、テュロスが途中からテュルスになる。  
 又、一二四頁に出て来るエキュー・ド・フ  
 ロアランは一三七頁以下のスキヤン・ド・  
 フレキシアンと同人物ではないだろうか。  
 年代では、一一三〇↓一一二八(三九頁)、  
 一一九〇↓一一九一(九三頁)、一二七二↓  
 一二七一(一〇二頁)、一二八七↓一二八九  
 (一〇五頁)、一三三三↓一三二二(一四八  
 頁)。

これらの小さな瑕瑾により本書の価値が  
 大きく損われるとは思わないが、機会を見  
 つけて検討されることが望まれる。

「あとがき」には参考文献表が付されて  
 いる。同様の主題を扱いながら、外国語文  
 献で橋口氏のものに一致するのは J. Char-  
 pentier と S. Runciman のみである。こ  
 れは、橋口氏のものが仏語文献中心である  
 のに対し、本書は独語中心である故もある

うが、語学上の問題だけでは済まない気も  
 する。

以上の他にも述べるべきことは多いと思  
 われるが、紙幅の都合もあり、又、より包  
 括的な、或いは個々の事例のより厳密な論  
 評については、必ずしも専門を同じくする  
 のではない紹介者の能くなし得る所ではな  
 い。より適任者の精査に俟ちたいと思う。

以上、蕪辭を連ねたが、先にも述べた如  
 く、この分野の研究に乏しい我国にあって  
 は、いずれにせよ邦語文献が増えることは  
 それなりの意味を持つている。今後、本書  
 などを一つの契機として、盛んに興味をも  
 たれるようになることが望まれる。

(新書版 一八八頁 一九七六年二月 中  
 央公論社 三四〇円)  
 (八塚春児 京都大学大学院生)

補正

前号掲載「北小路家文書について」にお  
 いて、安芸氏と北小路家との関係を不明と  
 しておいたところ、文書所蔵者の北小路博  
 央氏より懇篤なる書状を頂き、同家に伝来  
 する「弁才天祠記事」および系図等により、  
 北小路は安芸の別称に他ならぬ旨御指摘を

受け、北小路氏は安芸家の由緒正しい御子  
 孫であることを知ったので、ここにお詫び  
 とともに謹んで訂正致したい。(今合記)

正誤表

第六〇巻二号掲載の伊藤之雄氏の研究ノ  
 ト「元老の形成と変遷に関する若干の考察」  
 において以下の誤りがありましたので、お  
 詫びとともに訂正させていただきます。

| 頁  | 段 | 行  | 誤          | 正 |
|----|---|----|------------|---|
| 七一 | 上 | 八  | いずれも↓いずれにも |   |
| 八二 | 上 | 一〇 | 山形 ↓山県     |   |
| 八四 | 下 | 三  | 注告 ↓忠告     |   |
|    |   | 一〇 | 利録 ↓利謙     |   |
| 八五 | 上 | 七  | 輔クリ ↓輔クル   |   |
|    |   | 一四 | 協の協力↓協力    |   |
|    |   | 一八 | 収めて ↓改めて   |   |
| 八六 | 上 | 四  | 収捨 ↓收拾     |   |
|    |   | 八  | 間問題 ↓問題    |   |
| 八八 | 上 | 一二 | 招き ↓召集     |   |
| 九二 | 上 | 一六 | 隠健 ↓穩健     |   |

『史林』投稿規定

本誌の投稿規定は次の通りです  
 ◇資格 本会員であること  
 ◇投稿受付原稿の種類、長さなど

○研究論文・研究ノート

四〇〇字詰五〇枚程度

研究論文には四〇〇字以内の「要約」

と、「英文要約」を添付のこと（研究

ノートには両方とも不用）

註は原則として各章末に入れること。

○学会動向・批判と反省

四〇〇字詰三〇枚以内

○書評 四〇〇字詰二〇枚以内

○紹介 四〇〇字詰三枚程度

◇送先 史林編集委員会

〒六〇六 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

バックナンバーのお知らせ

『史林』のバックナンバー在庫は次の通りです。お申込は必ず前金にて、郵送の場合送料（各冊四〇円）を添えて下さい。

- 三三巻一号
- 三四巻一・二・四号
- 三八巻二・四号

三九巻三・六号 四〇巻六号

四一巻四号 四二巻五号

四三巻二・四号・六号

四四巻六号

四六巻四・五号

四七巻一・六号 四八巻三・五号

四九巻三・五・六号

五〇巻一・四・六号

五一巻一・六号

五二巻一・六号 五三巻一・六号

五四巻一・六号 五五巻一・六号

五六巻一・六号 五七巻一・六号

五八巻一・六号 五九巻一・六号

六〇巻一・二号

頒価は五六巻六号までは五〇〇円、五七

巻一号～五八巻六号は六〇〇円、五九巻一

号以降は七五〇円です。

なお、より多くの学兄が史学研究会に入会され、本誌を定期購読されるようお勧め致します。会費は年四、〇八〇円です。

編集後記

今冬の寒波は例年にならない厳しいものでしたが、三月に入って急に暖かく、はや中庭の桜が満開の此頃です。今号は若い優秀の力作三篇を得、論説を飾ることができまし

た。三月は例年異動の季節ですが、本会におきましても編集部若干の交替がありました。委員の田中峰雄氏が京都大学人文科学研究所助手に御栄転になり、後任には八塚春児氏に加わられて御活躍中で、他にも二、三異動がある見込です。詳細は追って御報告申し上げます。なお六〇巻記念事業委員会が発足し、特別号（総目録）の編集に着手していることをお知らせ致します。

（奇舌学人）

一九七七年四月二五日印刷 定価七五〇円  
 一九七七年五月一日発行

史林（第六〇巻第三号）

京都市左京区吉田本町  
 京都大学文学部

発行人 史学研究会

理事長 佐藤 長  
 振替京都五一五五番

印刷所 京都市下京区七条御所ノ内中町五〇  
 中村印刷株式会社

# THE SHIRIN

or the

## JOURNAL OF HISTORY

---

Vol. LX No. 3

MAY 1977

---

### CONTENTS

#### Articles:

- A Mass Immigration and the Know Nothing Party .....Y. Sasai ( 1 )  
Holding of 'Fields and Hills' in Nara Era .....R. Nishiyama ( 36 )  
The Opium Issue during the *Hsien Feng* 咸豐 Period .....H. Inoue ( 73 )

#### Book Reviews:

- T. P'eng, *The Modernization of China  
and the Meiji Restoration* .....S. Kinjô (107)  
T. Hori, *A Study of Chiin tien* 均田 System .....H. Ito & A. Naitô (117)  
Y. Inoue, *The Origins of European Bourgeois Society*.....K. Horiuchi (124)

#### Miscellaneous :

---

*Published*

*by*

THE SHIGAKU KENKYUKAI

(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan